

空白

離婚 親が勝手に決める人生

ぼくらを置いて家を出るとき

母は どんな気持ちだったのか

さみしかったのか 悲しかったのか

それとも 肩の荷をおろして 楽になったのか

母が 家を出て三ヶ月後

父が事故で亡くなった

兄弟三人とおばあちゃんとの暮らし

弁当は 自分で作る

だから 開けても楽しみがない

「おかん またきゅうり入れとるわ」

そんなこと いっぺん言ってみたかった

夜遅く帰ってきてても

友達を呼んでも 怒る人もいない

楽だと思っただけ ほんとはしんどかった

▶ 詩の作者 ◀

『奈良少年刑務所詩集 空が青いから白をえらんだのです』

(寮美千子編／新潮社) より

二十歳の時 母から連絡があった

母は 旅館で働いていた

十年ぶりに 会うことになった

どんな顔しょ なにしゃべろ

でも 会ったらふしぎと言葉も出て

いつのまにか 笑顔で話していた

いっしょに住むことになって

母は 仕事に行くほかに 弁当を作ってくれた

通勤途中で そつと開けてみたら

たまご焼き 唐揚げ ウインナ

ぼくの好きなものばかり

離れていても知っててくれたんや

子どもの好きなもん

これから毎日 十年分の空白を

弁当箱に詰めていきます

▼ 表紙絵の作者 ▲



駒田芳久
(こまだ・よしひさ)

1920 (大正9)年6月12日、大阪府豊中市に生まれる。1937 (昭和12)年、甲陽中学校卒業。1938 (昭和13)年4月、東京美術学校 (現・東京芸術大学) 油画科に入学。在学中は演劇にも没頭する。1941 (昭和16)年3月、卒業。1944 (昭和19)年、応召。沖縄県那覇市球第12427部隊イ隊に所属。1945 (昭和20)年5月20日、激戦地だった沖縄本島稲嶺にて戦死。東京・世田谷区の代田にアトリエを構えていたこともあり、戦没後に縁あって画家・脇田和氏に住居が譲渡された。享年24。